

# アテネのアクロポリスの ローマとアウグストゥス神殿の配置について

渡邊道治\*

## On Location of the Temple of Rome and Augustus on the Acropolis in Athens

by  
Michiharu WATANABE

(Received October 31, 2015)

### Abstract

In this paper, comparing with other temples dedicated to goddess Roma and deified Augustus in ancient Mediterranean World, the following three features are drawn out on the location of the Temple of Rome and Augustus on Acropolis in Athens; (1) this temple is only one constructed on acropolis, (2) the temple coexisting with another temple (=Parthenon) is based on a traditional arrangement of the temples in ancient Greek-Roman architecture, (3) the axial placement of this temple with an another temple (=Parthenon) is an exceptional example. These three features lead us to an acknowledgement that the ancient Athenians would accept both of the roman goddess and new ruler and continue worship goddess Roma and divine Augustus.

Key Words : *temple, Roma, Augustus, Athens, acropolis, location*

### [1]研究の目的と方法

アテネのアクロポリスはギリシア、ヘレニズム、ローマ時代を通じてこの都市の中心的核をなすもののひとつであった。ここにはパルテノン神殿やエレクトイオンなどアテネのみならず、ギリシア世界を代表するきわめて重要な神殿および宗教建築が建てられていた。アテナ女神を祀るパルテノン神殿の東側正面の前に、アウグストゥス時代にローマとアウグストゥスの神殿が建設された(図1、2)<sup>(1)</sup>。この神殿はスタイロベートの直径が7.47mほどの円形平面をなす神殿で、9本の円柱で囲まれ、イオニア式オーダーを備えている<sup>(2)</sup>。この神殿の配置に関する問題についてはこれまであまり論点とされることはなかった<sup>(3)</sup>。

そこで、本稿の目的は、紀元前1世紀後半以降の古代地中海世界において同じローマとアウグストゥスを祀る他の神殿との比較を通じて、このアテネの円形神殿がもつ配置上の特徴を明らかにし、その配置に見える特徴から神殿建設の意味について考察することである。

### [2]資料について

アテネのローマとアウグストゥスを祀る円形神殿の配置上の特徴を見いだすために、まず古代地中海世界で現在確認することが可能なローマとアウグストゥスの神殿について表1のようにまとめた。この表には遺構として確認できるものと、現存はしないが古典文献や貨幣等で確認できるものを含めている。表の左欄より右に向かって順次、都市名(古代と現代)、現在の国名、現存遺構以外の資料、建設時期、神殿の立地場所、フォルムや神域など囲まれた空間内での神殿の位置(図3参照)、神殿と囲まれた空間の中心軸との関係、他の神殿との位置関係をまとめたものである。

図3に示されたように、囲まれた空間内での神殿の位置はAからEの5つのタイプに分かれる。Aは列柱廊などに囲まれた空間の中心で、かつ中心軸上に神殿が置かれている場合である。Bは囲まれた空間の奥の方で、かつ中心軸上に神殿が置かれており、Cは同じく中心軸上に神殿があるものの、囲まれた空間の最奥に神殿背面が接している場合である。Dは囲まれた空間の中心軸上で、

\*経営学部教授

かつ神殿正面がその囲まれた空間の一辺側に揃えられている場合である。最後の E は 3 方を列柱廊や壁で囲まれ、残りの 1 方の開放された側に向かって神殿正面が置かれる配置の仕方である。

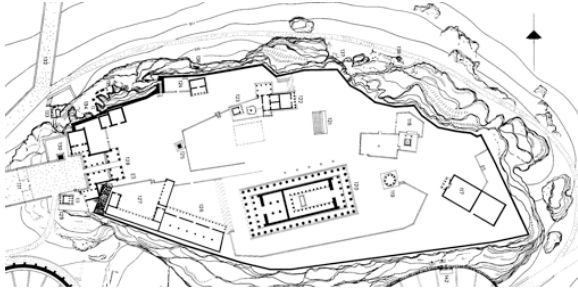
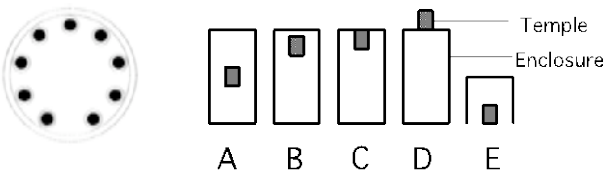


図1 アテネのアクロポリスの  
ローマとアウグストゥス神殿配置図



左：図2 アテネのアクロポリスの  
ローマとアウグストゥス神殿平面図

右：図3 囲まれた空間内での神殿の位置の分類図

表1より明らかなように、現在のところ確認できるローマとアウグストゥスを祀った神殿は18例であった。18例の中でペルガモン Pergamon、マイラサ Mylasa、ニコメディア Nicomedia の3都市における神殿の遺構は、現在のところ確認されていない。この18例の神殿の建設年代を現代の国別にまとめたものが表2である。この表より、アウグストゥスが皇帝となる以前のオクタウィアヌス時代に建てられたものが2例、アウグストゥス時代が8例、ティベリウス時代が5例、ハドリアヌス時代が1例、セプティミウス・セウェルス時代が1例であり、残り1例はローマ時代建設と見られる。オクタウィアヌス時代建設の2例について見るといずれも小アジアで確認できる。ひとつはニコメディアに建設された神殿であり、その建設年代は紀元前29年であった。この神殿は現存せず、ディオ・カッシウスの記述において確認でき、かつハドリアヌス時代鑄造の貨幣にその正面の姿を見ることができ(4)。もうひとつはペルガモンに見られ、この神殿も文献上に紀元前29年に建てられたと記されているが、現存遺構は確認されていない(5)。

表1 ローマとアウグストゥス神殿の一覧表

| 古代都市名         | 現代都市名                                  | 現在の国名    | 遺構以外  | 建設時期                             | 神殿の立地場所 | 囲まれた空間内での神殿の位置 | 神殿と囲まれた空間の中心軸上の関係 | 他の神殿との配置関係    |
|---------------|----------------------------------------|----------|-------|----------------------------------|---------|----------------|-------------------|---------------|
| Alalia        | Aleria (Corsica)                       | France   |       | Hadrian                          | フォルム    | C              | 中心軸               | 対面            |
| Ancyra        | Ankara                                 | Turkey   |       | Augustan                         | 不明      | 不明             | 不明                | 不明            |
| Athenai       | Athens                                 | Greece   |       | Augustan                         | アクロポリス  | 囲まれた空間はない      | 囲まれた空間はない         | 同一軸上、同じ方向に向く  |
| Augusta Ambia | Seine-Martitime                        | France   |       | Seferan (Septimius Severus)      | 神域      | A              | 中心軸               | 単一            |
| Caesarea      | Caesarea Maritima (Caesarea Stratonis) | Israel   |       | Herode or 37 ~ 100 (by Josephus) | 神域      | A              | 中心軸               | 単一            |
| Conimbriga    | Condeixa-a-Velha                       | Portugal |       | Flavian                          | フォルム    | E              | 中心軸               | 単一            |
| Glanum        | Saint-Rémy-de-Provence                 | France   |       | ca. 27 B.C.                      | フォルム    | E              | 軸ずれる?             | 並列(他に1神殿)     |
| Leptis Magna  | Leptis Magna                           | Lybia    |       | 14~19                            | フォルム    | D              | 中心軸               | 並列(他に2神殿)     |
| Lugdunum Con  | Saint-Bertrand-de-Comminges            | France   |       | 5~25                             | フォルム    | 不明             | 中心軸               | 単一(ただし神殿は逆向き) |
|               | Magdalensberg                          | Austria  |       | Tiberian, but not finished       | 神域      | A              | 中心軸               | 単一            |
| Minturnae     | Minturno                               | Italy    |       | 30                               | 神域      | E              | 軸ずれる              | 並列(他に1神殿)     |
| Mylasa        | Milas                                  | Turkey   | スケッチ  | Roman or 12 B.C. (by R.Chandler) | 不明      | 不明             | 不明                | 不明            |
| Nicomedia     |                                        | Turkey   | 貨幣、文献 | 29 B.C.                          | 不明      | 不明             | 不明                | 不明            |
| Ostia         | Ostia                                  | Italy    |       | Tiberian                         | フォルム    | C              | 中心軸               | 対面            |
| Pergamon      | Bergama                                | Turkey   | 文献    | 29 B.C.                          | 不明      | 不明             | 不明                | 不明            |
| Pula          | Pula                                   | Croatia  |       | 2 B.C.~14                        | フォルム    | D              | 軸ずれる              | 並列(他に2神殿)     |
| Tarracina     | Terracina                              | Italy    |       | 27 B.C.~1 B.C.                   | フォルム    | D?             | 中心軸に平行?           | 不明            |
| Vienna        | Vienne                                 | France   |       | Augustan                         | フォルム    | 不明             | 中心軸               | 単一            |

表2 建設時期・国別の  
ローマとアウグストゥス神殿の建設数

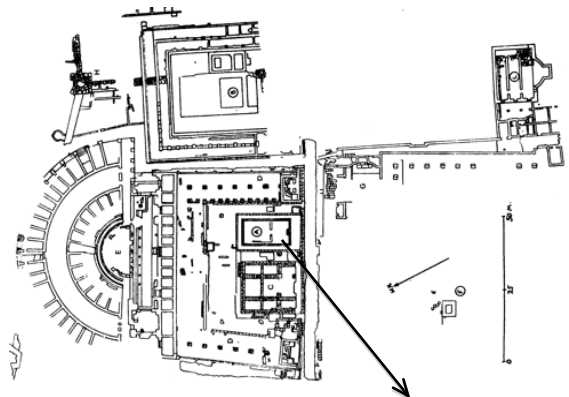
|          | アウグストゥス時代以前 | アウグストゥス時代 | ティベリウス時代 | ハドリアヌス時代 | セプティミウス・セウェルス時代 | ローマ時代 | 合計 |
|----------|-------------|-----------|----------|----------|-----------------|-------|----|
| Austria  |             |           | 1        |          |                 |       | 1  |
| Croatia  |             | 1         |          |          |                 |       | 1  |
| France   |             | 2         | 1        | 1        | 1               |       | 5  |
| Greece   |             | 1         |          |          |                 |       | 1  |
| Israel   |             | 1         |          |          |                 |       | 1  |
| Italy    |             | 1         | 2        |          |                 |       | 3  |
| Lybia    |             |           | 1        |          |                 |       | 1  |
| Portugal |             | 1         |          |          |                 |       | 1  |
| Turkey   | 2           | 1         |          |          |                 | 1     | 4  |
| 合計       | 2           | 8         | 5        | 1        | 1               | 1     | 18 |

### [3]アテネの円形神殿の配置上の特徴

まず、今回の分析で取り上げた18例のローマとアウグストゥス神殿が建てられた場所を見ると(表1)、神域に4例、フォルムに9例、場所不明が4例で、アクロポリスに建てられたのはアテネの神殿のみであった。神域に作られた4例はイスラエルのカエサレア・マリッティマ Caesarea Marittima<sup>(6)</sup>、フランスのアウグスタ・アンビアンルム Augusta Ambianorum<sup>(7)</sup>、オーストリアのマグダーレンスベルグ Magdalensberg<sup>(8)</sup>、イタリアのミントウルノ Minturno<sup>(9)</sup>(図4)であり、建てられた地域や年代に特別な共通点があるわけではない。この4例の中の後者2つの神殿、すなわちマグダーレンスベルグとミントウルノの場合は、ローマとアウグストゥス神殿が立つ神域は3方を列柱廊で囲まれ、残りの1方は開放され、その前面にはフォルムが広がっている(図3のEタイプ)。つまり、列柱廊で囲まれた神域に建てられているといっても、実際にはフォルムに面して神殿が立つ形をなしており、むしろフォルムの奥に神殿が建てられていると見なすべき配置の仕方となっている。このことから、純粋に囲まれた神域に建てられた場合となるのはカエサレア・マリッティマとアウグスタ・アンビアンルムのわずか2例のみとなり、フォルムに建てられた場合が9例となる。この結果からローマとアウグストゥスの神殿は、現存遺構で見える限りそのほとんどがフォルムに建てられており、神域に立つ場合は極めて少数であって、さらにアクロポリスに立つ場合は例外といってもよいことが明白となった。

次にローマとアウグストゥスの神殿がパルテノン神殿という異なる神を祀る他の神殿と併存している点について、他のローマとアウグストゥス神殿の場合と比較してみる。その結果、他の神殿と共に併存していることは特別なことではなく、むしろ自然なことであったことが今回の分析で明らかとなった。今回の分析でとりあげたロ

ーマとアウグストゥス神殿18例の中で(アテネの場合を除き)、単独で立つ場合が6例、他の神殿と並列に並び立つ場合が4例、2つの神殿が対面して立つ場合が2例、その他が1例で、他の神殿との関係が不明の場合が5例であった。このように、その配置が判明する現存遺構で見える限り、13例中の6例は他の神殿と併存していた。したがって、ローマとアウグストゥス神殿が他の神を祀った神殿と共通して建てられることはしばしば行われたことであり、単独に立っていることが圧倒的に多かったわけではないといえる。



ローマとアウグストゥスの神殿

図4 ミントウルノのローマとアウグストゥスの神殿

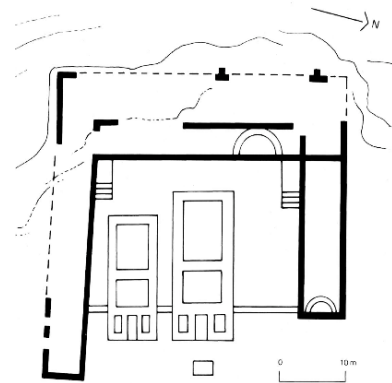


図5 グラムムのローマとアウグストゥス神殿

(どちらか一方の神殿、あるいは2つの神殿が共にアウグストゥスを祀っていた可能性もある)

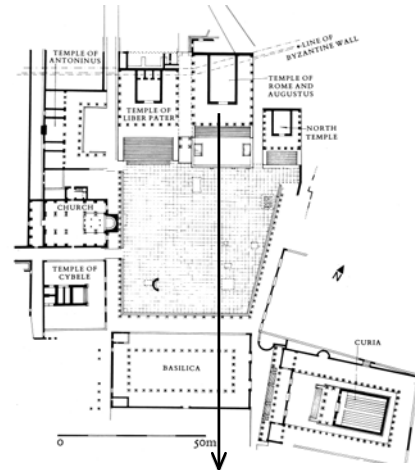
併存する場合を見てみるとローマとアウグストゥス神殿が並ぶ例はミントウルノ(図4)、グラムム Glanum(図5)<sup>(10)</sup>、プーラ Pula、レプティス・マグナ Leptis Magnaの4都市の神殿においてであった。ミントウルノではカ

ピトリヌス神殿と正面位置を揃えた形で並び立っているが、プーラではフォルムの短辺側に中央のやや大きめの神殿を挟むようにして東西にひとつずつ、合計3つの神殿が並列に並ぶ<sup>(11)</sup>。その東西の2つの神殿は規模も意匠も全く同一の双子神殿であり、保存状態の良い西側の神殿はローマとアウグストゥスを祀ったものとされている。レプティス・マグナではフォルムの北側に、中央にローマとアウグストゥス神殿を、その左右にリーペル・パテル神殿と祀られた神が不明の神殿が正面の位置を揃えて並び立つ<sup>(12)</sup> (図6)。

異なる神を祀った神殿を平行に複数配置する神殿の配置の仕方はギリシア時代、ヘレニズム時代、ローマ時代を通じて、またエトルリアの神殿においても見受けられる一般的なひとつの配置の仕方であった。たとえばオリンピアの神域やエピダウロスのアスクレピオス神域、イタリアのピルジの神域、ローマのラルゴ・アルジェンティーナの神域など数多くの事例をあげることができる。

これに対して神殿同士が対面して配置されているのがイタリアのオスティア(図7)とコルシカ島のアラリア Alalia のフォルムに立つローマとアウグストゥス神殿である(図8)。オスティアではフォルムのカピトリヌス神殿に対面してティベリウス時代にローマとアウグストゥス神殿が建てられ、ハドリアヌス時代にフォルムが拡張され、カピトリヌス神殿がより大きな規模に改築された際にも両神殿が対面する配置の仕方が受け継がれた<sup>(13)</sup>。アラリアではやや不規則な細長い長方形平面のフォルムの両短辺側にカピトリヌス神殿と、ローマとアウグストゥス神殿が対面するようにハドリアヌス時代に建てられた<sup>(14)</sup>。

今回の分析においてローマとアウグストゥス神殿が他の神殿と共に併存して建てられた事例を検討してみると、カピトリヌス神殿と共に併存する場合がしばしば見受けられる。さらに、併存する場合においてローマとアウグストゥス神殿が他の神殿の後に追加する形で建設されていることが一般的である。周知のようにカピトリヌス神殿はローマ帝国全域に共通して崇拝された最も普遍的な神であり、ローマ帝国内すべての都市において最も重要な神を祀る建物であった。これらの点を考慮すれば、パルテノン神殿がアテネ市の最も重要な神であるアテナ神を祀っており、かつその神殿にローマとアウグストゥスの神殿が後に付け加わった形式は、ローマ帝国内の他のローマとアウグストゥス神殿が他の神殿と併存して建設された場合ときわめて共通した特徴を示していることをここで指摘できる。



ローマとアウグストゥスの神殿

図6 レプティス・マグナのローマとアウグストゥスの神殿平面図

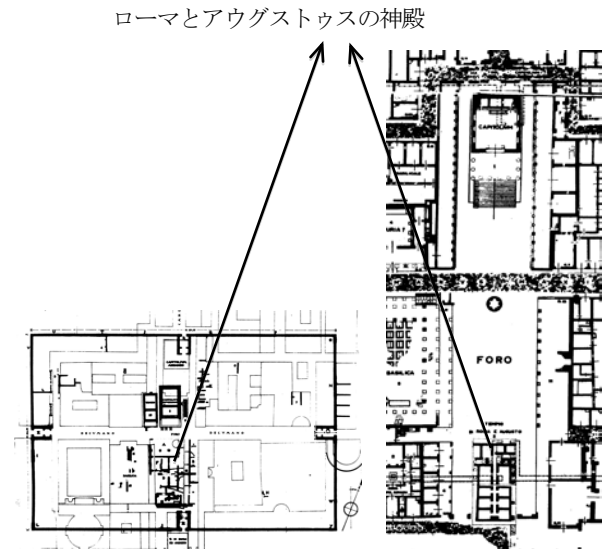
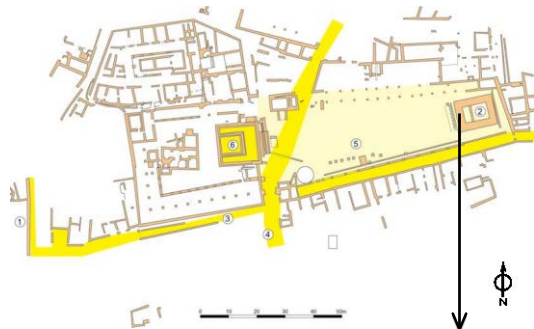


図7 オスティアのローマとアウグストゥスの神殿配置図 (左：クラウディウス時代、右：ハドリアヌス時代)



ローマとアウグストゥスの神殿

図8 アラリアのローマとアウグストゥス神殿配置図

また、アテネのアクロポリスの上でパルテノン神殿と、ローマとアウグストゥス神殿が共に同じ東向きに正面を向けて立っていることは、ギリシアからヘレニズム時代にかけての神殿の一般的な配置の方法に従ったものといえる。なぜならギリシアの神殿はアルカイック期より神殿は東向きにつくられることを基本としていた<sup>(15)</sup>。このことは数多くの現存するギリシア神殿の配置において見いだせる共通の特徴であり、そうであるからこそ、たとえばバッサイのアポロ神殿が南北を向いて建てられていることがきわめて異例であるとしばしば指摘されるゆえんである<sup>(16)</sup>。つまり、アテネのローマとアウグストゥスの神殿が東向きであることはギリシア神殿の伝統的な配置の仕方を受け継いだものといえる。

ただし、アテネのローマとアウグストゥス神殿がパルテノン神殿と共に同じ東側を向いて同一軸線上に並んで立っているという配置上の特徴は他のローマとアウグストゥス神殿には全く見いだせないものである(表1参照)。ローマとアウグストゥス神殿がカピトリヌス神殿など他の神殿と平行に並んで配置されたミントゥルノ、グラヌム、プーラ、レプティス・マグナの4つの都市では、神殿正面を揃えるように並べられている。また、オステリアとアレリアの場合にはローマとアウグストゥス神殿は他の神殿と対面しており、その上、この2つの神殿の中心軸は若干ずれて配置され、同一軸線上には置かれていない。このようにアテネ以外のローマとアウグストゥス神殿はすべて他の神殿と同一軸の上に並んでいないのである。そこで神殿の軸線の上に神殿ではないが他の宗教的な建物を配置する具体例を求めてみると、神殿の前に祭壇が置かれる場合がそれに該当する。ギリシアのアルカイック期以来ローマ時代まで、神殿の前で軸線の上に適度な距離をおいて祭壇が配置されることはきわめて一般的であった。神殿には神像が納められ、その前に置かれた祭壇では神に捧げる宗教的儀式が行われていた。祭壇と神殿はともに基本的に東の方向、すなわち日の出の方向を向き、天空の神、天上の神に向かっていた<sup>(17)</sup>。このアルカイック期以来のギリシアの神殿と祭壇の配置、そして東の方位との関係をアテネのアクロポリスのローマとアウグストゥスの神殿は受け継いでいると解釈できよう。まさしく、アテネのローマとアウグストゥスの神殿は、ギリシア神殿の祭壇に呼応する位置に建てられたものとみなせよう。

以上のことから、アテネのアクロポリス上に立つローマとアウグストゥス神殿はパルテノン神殿とともに両者一体となって東方の天空の神、天上の神に向かっていたことになる。自明のことであるが、パルテノン神殿はアテネ市の守護神であるアテナ女神を祀っており、ローマと

アウグストゥス神殿はその名が示す通りローマ神と神格化されたアウグストゥスに捧げられている。換言すれば、アテネ市民はローマに対して、自らの都市の最も重要な神と、征服者ローマ人が信奉するローマ神と神格化されたアウグストゥスを同等の神として崇拝することを明瞭に表現していることを、この円形神殿の配置から読み取れるのである。

#### [4]結論

現存遺構を含めて確認できるローマとアウグストゥス神殿との比較をもとに分析した結果、アテネのローマとアウグストゥス神殿はその配置計画に関して、ギリシア・ヘレニズム建築の伝統に従った要素と特殊な例外的要素を合わせもっていることが明らかとなった。伝統的な要素は東側を向き、既存のパルテノン神殿とともに併存していることである。一方、既存のパルテノン神殿と同一軸上に前後に並べて配置していることはきわめて例外的である。このように既存のアテネ神を祀る神殿と、ローマとアウグストゥスという新たな神を祀る神殿を併存させながら同一軸上に並べて東向きに配置させることに、アテネ人が新たな支配者であるローマ人が崇拝する神を受け入れ、既存の神とともに信仰していく姿勢を示したものであるとしてその建設の意味を読み取ることができる。

#### 注釈

- (1) J. Travlos, *Bildlexikon zur Topographie des antiken Athen*, Tübingen, 1972, p. 71, pp. 494-497.
- (2) この円形神殿について論じた既往研究として W. Binder, *Der Roma-Augustus Monopteros auf der Akropolis in Athen und seine Typologischer Ort*, Stuttgart, 1967, H. Whittaker, Some Reflections on the Temple to the Goddess Roma and Augustus on the Acropolis at Athens, in *Greek Romans and Roman Greeks* (E. N. Ostenfeld ed.), Aarhus University Press, Aarhus, 2002, p. 30, R. Mellor, *Thea Roma* (Hypomnemata), vol. 42, 1975, pp. 25-39, L. Fecchi, Il monópteros di Roma e Augusto sull' Acropoli di Atene : Funcione celebrativa e pianta circolare, in *Thalassa. Centi e Cultura del Mediterraneo antico*, vol. 1, 2004, pp. 139-170. などが上げられる。円形神殿の推定復元の直径については田口案を参考とした(田口倫那他3名、アテネのアクロポリスにあるローマとアウグストゥス神殿に関する研究-その4-平面及び立面の復元試案、日本建築学会九州支部研究報告、第52号、2013年3月、p. 639)。
- (3) たとえば L. Fecchi は、パルテノン神殿と、ローマと

- アウグストゥス神殿が同一軸の上に前後して並んで立っていることに対し、アテネ市民の救済者であり、かつローマ支配の創設者である気配をアウグストゥスという一人の人物の中に同化されていることを暗示しているのだという指摘している (L. Fecchi, *op. cit.*, p. 166)。
- (4) Cass. Dio, 51. 20. 6-7.
- (5) *Ibid.*
- (6) Joseph. *AJ.*, 15. 331-341, Joseph. *BJ.*, 1. 21. 7, M. A. Chancey and A. Porter, The Archaeology of Roman Palestine, in *Near Eastern Archaeology*, vol. 4. 4, 2001, pp. 169-170, R. Stillwell et al., *The Princeton Encyclopedia of Classical Sites*, Princeton, Princeton University Press, 1976, p. 182.
- (7) R. Stillwell et al., *op. cit.*, pp. 113-114.
- (8) R. Stillwell et al., *op. cit.*, p. 542, K. von Gernot Piccottini, Die Stadt auf dem Magdalensberg, in *A. N. R. W.*, vol. 2, 1977, pp. 274-286.
- (9) R. Stillwell et al., *op. cit.*, p. 583, F. Coarelli, *Lazio: Guide archeologiche Laterza*, 1984, Roma-Bari, pp. 372-375.
- (10) 北側の少し大きめの神殿は紀元前 30 年頃の建設とみられ、おそらくローマ化された地方神を祀っていたとみられる。一方、南側のやや小さ目の神殿は紀元前 27 年にアグリッパがこの地を訪れた際に建てられたとみられ、以前からこの地で崇拝されていた健康に関する神を祀っていたと推測される。しかし、紀元前の最後の十年ほどの時期にこの既存の神殿に皇帝一族に関する彫像が納められたことから、ローマとアウグストゥスを祀る神殿へと変貌したと解釈されている。ただし、2つの神殿が共にローマとアウグストゥスを祀っていたのか、それとも一方の神殿のみであったのかは今のところ断定できない (R. Stillwell et al., *op. cit.*, p. 357, R. Beton, R. Chevallier and P. Pinon, *Architecture et urbanisme e Gaule romaine*, tome 1, Paris, 1988, pp. 146-147, P. Gros, Les temples géminés de Glanum. Etude préliminaire, in *Revue archéologique de Narbonnaise*, tome 14, 1981, pp. 125-158.)。
- (11) R. Stillwell et al., *op. cit.*, p. 721, S. Mlakar, *Ancient Pula*, Pula, 1972 (fourth ed.), pp. 39-41, M. Sinobad, Capitoline Temples in Croatia, in *Opuscula Archaeologica Radovi Arheološkog zavoda*, vol. 31, 2008, pp. 235-239.
- (12) J. B. Ward-Perkins, *Roman Imperial Architecture*, The Perikan Art History, 1990 (reprinted), London, pp. 327-373. R. Stillwell et al., *op. cit.*, p. 499.
- (13) C. Pavolini, *Ostia: Guide archeologiche Laterza*, Roma-Bari, 1983, pp. 98-102.
- (14) R. Stillwell et al., *op. cit.*, pp. 29-30, J. Jahasse, Les fouilles d'Aléria (Corse) : l'acropole et ses problèmes (1962), in *Gallia*, vol. 21, 1963, pp. 83-91.
- (15) W. B. Dinsmoor, Archaeology and Astronomy, in *Proceeding of the American Philosophical Society*, vol. 80, 1939, pp. 95-173, B. Bergquist, *The Archaic Greek Temenos*, Lund, 1967, pp. 112-119.
- (16) W. B. Dinsmoor, *The Architecture of Ancient Greece*, New York, 1950 (third ed. reprint), p. 155.
- (17) B. Bergquist, *op. cit.*, p. 113.
- 図版出典：
- 図 1: J. Travlos, *op. cit.*, p. 71.
- 図 2: J. Travlos, *op. cit.*, p. 494.
- 図 3: 筆者作成。
- 図 4: F. Coarelli, *op. cit.*, p. 373.
- 図 5: P. Gros, *op. cit.*, fig. 1.
- 図 6: J. B. Ward-Perkins, *op. cit.*, pp. 372.
- 図 7: F. Pasini, *Ostia antica*, Roma, 1978, tavola: pianta generale, C. Pavolini, *op. cit.*, pp. 98.
- 図 8: M-L. Marquet, *Alalia-Aleria*, Aleria, 2011, p. 18.